

一側性難聴児に対する見方と指導

～通級指導担当教師の指導歴から～

○中川辰雄

(横浜国立大学教育学部)

KEY WORDS: 一側性難聽 通級指導教室 指導歴

新生児聴覚スクリーニングの普及により、聴覚障害児に対する教育が進んでいる。しかし片耳にのみ有意な聴力損失がある児童生徒(以下、一側性難聴児)に対して、必ずしも教育的支援に結びつかない場合があることが懸念されている。本研究では小中学校の通級指導教室を担当している教師の指導歴から、一側性難聴児に対する見方と指導の実態について考察することを目的とする。

(方法)

A 市内の難聴言語障害通級指導教室を担当する教師を対象に、質問紙調査をインターネット経由で実施した。調査内容は教師の年齢、難聴言語障害通級での指導歴、一側性難聴児の指導の有無を尋ねた。表 1 に示す聞こえ、コミュニケーション、学業そして補装具に関する 13 の質問項目に対して、回答項目を「はい」、「いいえ」、「どちらともいえない」、「その他」を設けて回答を依頼した。最後に一側性難聴児の指導上の工夫について自由記述で回答を求めた。

表 1. 質問項目

聞き返しが多いですか。	聞こえ
相手の話を最後まで聞かないことが多いですか。	
一対一では話がわかるが、複数の人の話についていけないことが多いですか。	
相手と距離があると、聞こえにくいことが多いですか。	
音のする方向が、正しくつかめないことが多いですか。	
後ろから話しかけられると、無視することが多いです。	コミュニケーション
母学級で、友達を作り難そうですか。	
コミュニケーションが、とりにくそうですか。	
学級適応に、支援が必要なことが多いですか。	学業
算数の学力が、遅れ気味ですか。	
国語の学力が、遅れ気味ですか。	
補聴器や人工内耳、ロージャー等を使用しないことが多いですか。	補装具
補聴器や人工内耳等の調整が難しいことが多いですか。	

(結果および考察)

25名の担当者から回答があった。通級指導の指導歴により5年以下の9名と6～15年の6名、そして16年以上の10名に便宜的に分けて分析した。経験年数と一側性難聴児の指導の有無に関して度数分布表を作り分析した。その結果、指導歴が6年以上で一側性難聴児の指導経験が増加することがわかった。

一側性難聴児の特徴(13の質問項目より)

指導歴の違いが 13 の質問項目に対する回答率に差があるかどうか調べた(図 1)。その結果、「算数の学力が遅れぎみですか」と「補装具の調整が困難ですか」について 5%水準で違いがあることがわかった。その他の質問項目につい

では有意差が見られなかった。指導歴 5 年以下の教師の質問項目に対する回答分布が 4 つに分散していたのに対して、16 年以上の教師は質問項目によって回答が集中していた。特に「算数の学力が遅れ気味」については「どちらともいえない」に、「補装具の調整が困難」については「はい」の回答に集中が見られた。通級での指導歴が長くなるについて、一側性難聴児の指導経験も増加し、両側に聴力損失がある子どもと比較して聞こえ、コミュニケーション、学業では大きな違いがないことを経験する一方、補聴器等の調整の難しさを相対的に感じるが多くなることを反映した回答分布が得られたのではないと思われる。

一側性難聴児の指導(自由記述より)

テキストマイニングの手法の一つである KH Coder ver.3 (樋口、2015)を用いて、教師の一側性難聴児の指導上の特徴について調べた。分析対象にしたのは、指導歴5年以下の教師の自由記述12文124語と6～15年の教師の15文175語と16年以上の教師の24文287語であった。形態素解析に基づく計量テキスト分析(共起ネットワーク分析)を行った。紙面の関係から指導歴16年以上の教師のみの自由記述における語の共起ネットワークを図2に示した。

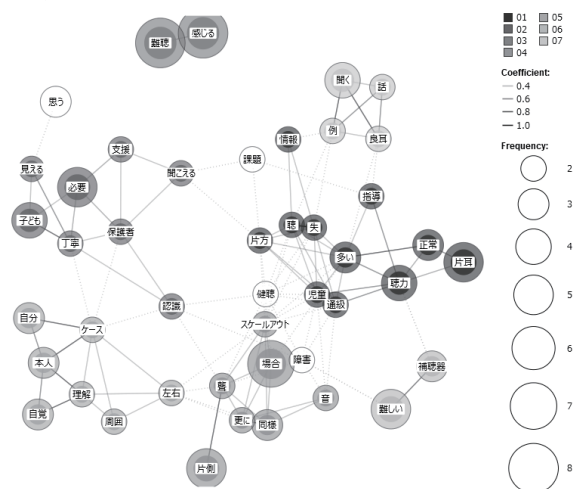
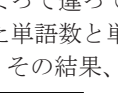


図2. 指導歴16年以上の教師の自由記述の共起ネットワーク

分析の対象にしたそれぞれの自由記述は、総単語数が指導歴によって違っているので、分析に使用した総単語数で共起した単語数と単語間の接続数をそれぞれ除して比較を行った。その結果、指導歴が16年以上の自由記述から、指導歴が長く一側性難聴児を指導する経験が増えるにつれて、自由記述の単語の数が増え、単語と単語間の接続が複雑に絡み合っ



指導歴	自由記述の単語数	自由記述の接続数
指導歴16年以上	8	6
指導歴16年以下	4	3

て全体を構成する文になることが見られた。また単語と単語間の接続するまとまりを示すサブグループの数が増加していたが、これは指導内容の豊富さと関連があると解釈される。一方、指導歴がそれ以下や一側性難聴児の指導経験が少ない場合の自由記述は、その傾向が弱いことが見られた。

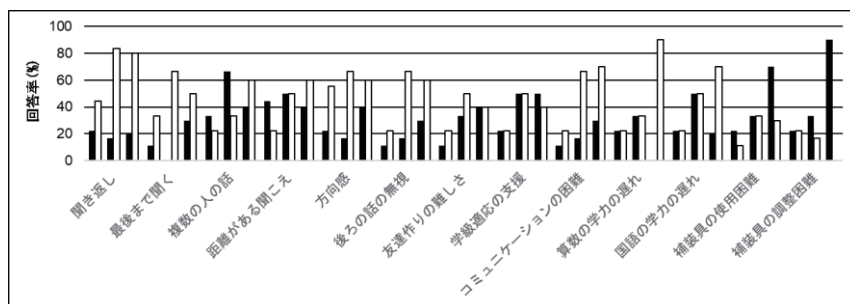


図 1. 指導歴の違いによる 13 の質問項目に対する回答率

ことが見られた。